

基礎看護実習における理論と実践の統合に対する教育

西 谷 美 幸

看護の進学課程における基礎看護実習は、准看護師教育で習得した日常生活の援助技術を確認して応用し、看護の理論と実践の統合を図る学習を積み重ねることを目的とする。本研究では、学生が援助を実践するなかで、教科で学んだ知識や理論を、学生自身が自覚して活用し統合するための教育上の課題を明らかにすることを目的とした。その方法として、学生の実習日誌の内容を、『科学的看護論』において看護実践の基本的な柱となる三重の関心に基づき分析した。その結果、学生の看護の視点が「知的な関心」に偏っていること、その内容も断片的なものにとどまっていることがわかった。患者の全体像に近づく前に目の前の現象に〈何かをなさそう〉という意識が強いために、患者の全人的な理解と理論に基づく看護の判断を深めにくくしている。学生自らが視点を広げる力をつけるために、教科での理論が活用できるという学問への関心や楽しさを意識づける教育が必要である。

キーワード：基礎看護実習，理論，実践，統合

I. 緒 言

看護教育において臨床実習は、学科で習得した看護の知識及び技術を実際に応用展開し、学問と実践を統合させるという大きな目的をもつ。その中で基礎看護実習は、看護師としての役割を自覚して、看護実践と学習との統合を実感する上で重要な意味をもつものである¹⁾。看護進学課程の場合、准看護師教育の上に教育を積み上げていくといった特徴がある。そのため、准看護師教育で習得した日常生活の援助技術を確認して応用し、自らの科学的根拠に基づく判断、計画、実践をすることにより、看護の理論と実践の統合を図る学習を積み重ねることになる。

银杏学園短期大学（以下、本学と略す）における基礎看護実習は、9月に「基礎看護学実習Ⅰ」（1単位 45時間）、12月に「基礎看護学実習Ⅱ」（2単位 90時間）を設定している。「基礎看護学実習Ⅰ」の目的としては〈入院し治療をうけている患者の生活を理解し、日常生活への援助ができる基本的能力を養う〉、「基礎看護学実習Ⅱ」の目的としては〈対象への看護を科学的に展開するための看護過程の基礎を学ぶ〉をあげて実習を行っている。特に、「基礎看護学実習Ⅰ」では、それまでの学習を踏まえて、科学的根拠を考えて実践することを実感して、学問への意欲と必要性を認識できる場となる必要がある。

今回私は、基礎看護学の「日常生活の援助技術」の教科を担当し、「日常生活の援助技術」で学生が学んだ知識と技術が実習という実践でどのように展開されているのかを明確にしたいと考えた。つまり、学生が日々の援助を実践するなかで、教科で学んだ知識や理論がどのような形で学生の認識上に具体的に現れてくるのか、学生自身が自覚して理論を活用し統合するためにどのような教育が必要となるか、今後の課題を検討することを本研究の目的とした。

Ⅱ. 研究方法

1. 対 象

本学2年課程看護学生1年次42名。うち同意の得られた41名を対象とした。

2. 調査方法

「基礎看護学実習Ⅰ」で学生が使用した記録用紙のうち、全実習5日分の日誌を分析した。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、研究をするにあたり、実習記録の使用に関して学生に書面で同意を得た。書面には、研究の主旨及びプライバシーの保持について説明した文を掲載し、実習記録使用の承諾の有無を選

択してもらい協力の依頼とした。その際、依頼の時期として学生の成績確定終了後とし、承諾の有無が成績等に関係しないことを合わせて口頭で説明した。

4. 調査内容

1) 対象の属性

学生の性別、年齢、臨床経験の有無について調査した。

2) 学習の状況

授業概要、実習概要、実習形態について調査した。

3) 日誌から抽出した日常生活の援助技術

学生が実習日誌で評価、考察をした援助項目を、日常生活の援助技術に限定して抽出した。

4) 実習日誌（評価、考察）の内容分析

本学では、看護過程を展開するにあたって、看護技術の一つひとつがもつ意味及び根拠を科

学的に思考する力をつける（看護の頭づくり）ために、薄井坦子の『科学的看護論』を使っている。これは、ナイチンゲールの理論を受け継ぎ発展させ、〈生命力の消耗を最小にするよう生活過程をととのえること〉を目的に、理論と実践を〈看護過程展開モデル〉として構築したものである。そのため、実習記録としても、「科学的看護論」に沿った様式の記録用紙を用い、実習指導を行っている。そこで、日々の看護実践に対して、学生がどのような視点で自分自身の看護を振り返っているのかを、実習日誌の評価、考察に表現されている内容で分析することにした。その指標として、「科学的看護論」において看護実践の基本的な柱となる「三重の関心」の視点で整理することにした。ここでいう「三重の関心」とは以下の内容²⁾である。なお、分析の一例を表1に示す。

表1 分析の具体例

目標（上位・中位）	日常生活をできるだけ安楽に過ごしてもらうために、排泄行動の維持向上を図る	
計画（下位目標）	実施（反応・観察）	評価・考察
食事後に排泄誘導を行う ・ベッドの右側に設置してあるポータブルトイレへ、移乗動作を自らの力で行えるように、安全面に注意しながら見守る。	食事後訪室し声かけをすると、最初は頭を横に振り拒否したが、再度声をかけるとうなずく。 中略 (移乗から排泄動作まで具体的に行動の様子を記載)	声かけで排泄を促すことで、排泄への意識が高まり、尿失禁、膀胱炎などの2次的な問題の予防につながるのではないかと。介助することを最小限にしてできるだけ自力でできるように見守っていくことが、排泄行動の維持向上につながるのではないかと。
関節の動きの観察	この一連の動作には手を貸すことなく自力でできている。	<div>排泄誘導：患者への援助の意味について考える → 知的関心 介助を最小限にし見守る：より健康な状態を思い描き、援助方法を具体化する → 実践的関心</div> <p>関節の動きや筋力の維持に努めることで日常生活動作の維持向上につながってくるだろう。そのためにリハビリを毎日行い、訓練を続けていく必要がある。</p> <div>間接の動き、筋力：運動機能の状態 → 知的関心 訓練の必要 → 実践的関心</div>

反省・感想

指導者欄

*表中のゴシック体の文字は、著者の分析過程を記載した

① 第一の関心（知的な関心）

対象の発達段階、健康障害の種類、健康の段階、生活過程の特徴を示す客観的事実から全体像（現象像）を描き、その健康状態の意味を大づかみにイメージし（表象像）、その人がより健康的な状態に変化するための諸条件を、身体と心と社会関係のつながりに時の流れを重ねて考える。

② 第二の関心（心のこもった人間的な関心）

“もう一人の自分”をつくりだし、対象の位置に移って日常生活の規制を追体験しつつ、その人の言動・表情・声など生活体の反応を手がかりに、その人のその時々気持ちを感じとってくる。

③ 第三の関心（実践的・技術的な関心）

①で得られた対象の客観的事実と、②で得られた対象の主観とを総合して全体像をつくりかえ（個別性を見つめる）、解決を要する対立が発生していないかを探り看護上の問題を明確にする。その問題が解決された状態を思い描き（より健康的な状態への上位目標）、その方向に変化させていく力をその人をめぐる事実のなかから探ってイメージ化し（中位目標）、その人のもてる力を最大限にはたらかせる方向でケア手段を具体化する（下位目標）。

Ⅲ. 結 果

1. 対象の属性

平成13年度本学短大入学の看護科1年次学生41名を対象とした。男子8名、女子33名、平均年齢25.1歳（18～52歳）である。教育背景としては、衛生看護科卒業13名（31.7%）、准看護婦養成所卒業28名（68.3%）であり、臨床経験のある学生は10名（24.4%）、ない学生は31名（75.6%）である。

2. 教科及び実習概要

調査対象である学生の授業「日常生活の援助技術」では、人間の生活行動の意味を多面的に捉える知識を学び、基本的な技術の確認を行った。その後、事例を用いた総合演習で、より対象に近づくための日常生活の援助技術演習を行った。

次に、「基礎看護学実習Ⅰ」では、〈医療施設としての病院の機能を知り、入院患者の生活を看護の視点でとらえ日常生活での援助について看護の過程がふめる〉を目標に、学内日2日、臨床実習5日の計7日間で行った。実習施設は、3つの総合病院で行い、合わせて9病棟において、実習生4～5名を配置し、担当教員は各病棟に1名を配置した。事前に受け持ち患者を臨床指導者と担当教員で検討、決定して、学内オリエンテーションで学生は受け持ち患者についての事前学習を行った。その後、5日の臨床実習では、臨床指導者、病棟スタッフ、教員等とともに日常生活の援助技術を中心に実習を行い、毎日30分間程度のカンファレンス（学生、指導者、教員参加）を設けた。

3. 日誌から抽出した日常生活の援助技術

学生が日誌上に表現した考察内容を分析するために、5日分の日誌（41名×5日分の延べ205日分）の評価・考察の欄から援助項目を抽出した。学生は、日誌にその日1日の看護実習体験のうち主要なものを選択して記載する。そのため、抽出した日常生活の援助技術の項目は、学生が実習期間中に経験した援助すべてではなく、学生自身が自分自身の行った援助を振り返る必要があると考えた項目となる。その結果を表2に示す。

学生が記載した日常生活の援助技術を抽出した結果、延べ総数は343件となった。その内容は大きく8領域に分かれ、最も多く表現された項目は、清拭、入浴介助等の「身体の清潔への援助」であり全体の3割を占める。以下、「良肢位・移動への援助」、「バイタルサインの測定、観察」、「食事への援助」、「排泄への援助」、「環境を整えるための援助」、「衣服を用いることへの援助」、「活動と休息への援助」となる。項目としては、本学の授業で教授している日常生活の援助技術の項目を数の多少はあるがすべて網羅³⁾している。

4. 実習日誌（評価、考察）の内容分析

抽出された343件の援助項目（前項）に対して、知識や理論の活用に結びつくどのような体験をしているかを分析するために、考察の内容を「三重の関心」すなわち、「知的な関心」、「人間的な関心」、「技術的な関心」の視点で洗い出した。その結果は、1件の項目に対して複数の視点から考察しているも

表 2 日常生活の援助項目

大項目	小項目	件数 (%)	小計 (%)
清潔	清拭	35 (10)	103 (30)
	入浴介助	28 (9)	
	口腔ケア	12 (4)	
	足浴	12 (4)	
	洗髪	5 (2)	
	爪切り	5 (2)	
	陰部洗浄	4 (2)	
	手浴	2 (1)	
良肢位、移動	機能訓練	35 (10)	94 (27)
	移動	22 (6)	
	散歩	14 (4)	
	体位変換	12 (4)	
	ベッド上訓練	9 (3)	
	歩行介助	2 (1)	
	バイタルサイン	41 (12)	41 (12)
食事	食事介助	36 (10)	36 (10)
排泄	排泄	31 (9)	35 (10)
	おむつ交換	4 (1)	
環境	環境整備	11 (3)	17 (5)
	ベッドメイキング	6 (2)	
衣服	寝衣交換	8 (2)	8 (2)
活動と休息	休息	4 (1)	9 (3)
	睡眠	3 (1)	
	余暇	2 (1)	
合計		343	343

表 3 考察内容の「三重の関心」別分類

	知的関心	人間的関心	技術的関心	合計
清潔	153	12	44	209
良肢位、移動	113	19	55	187
バイタルサイン	54	5	4	63
食事	39	9	17	65
排泄	50	6	22	78
環境	20	2	5	27
衣服	4	4	4	12
活動と休息	10	3	3	16
合計	443 (67%)	60 (9%)	154 (24%)	657

のもあるため、総数657件が抽出された。その結果を表3に示す。全体的にみると、「知的な関心」が443件（67%）、「人間的な関心」が60件（9%）、「技術的な関心」が154件（24%）となった。項目別の特徴としては、「バイタルサインの測定、観察」では、より「知的な関心」が高く、「人間的な関心」、「技術的な関心」はあまり表現されていない。「良肢位・移動への援助」、「排泄への援助」及び「食事への援助」では、「技術的な関心」がやや高い。また「食事への援助」では「人間的な関心」が他の項目より高くなっている。

さらに、「三重の関心」の内容をより詳しくも見たものが表4である。「知的な関心」の中では、「健康障害の段階」及び「生活」に目を向けている内容が多く（合わせて半数弱）、次いで援助の意味に触れている意見が2割であった。その中には具体的に、〈片麻痺のある患者に対して、健側を使い食事を取らせる〉、〈リハビリでこのくらい動かせることがわかったので、病棟でも時間がかかっても自分でできるところはやってもらう〉、〈いつもベッド上で寝たままでいるので、日中ベッド上座位にし、できるだけ起こしておくようにする〉などが挙げられていた。

「人間的な関心」では、ほとんどの意見が学生自身の位置から患者の頭の中を思い描く段階であった。

その中には具体的に、〈トイレに行った際、患者から「うしろで待っていて」と言われたことから、誰かが近くにいることで安心されたと思う〉、〈毎食後に歯磨きをした方がいいと説明したが、歯磨きをする気になれないようだ〉、〈声かけをすることで、意欲が高まったと思う〉などが挙げられていた。

「技術的な関心」では、「患者がこうなってほしい」という方法的な視点が圧倒的に多く（半数）なっている。その中には具体的に、〈筋力の維持のために、リハビリだけでなく病棟でも散歩等を取り入れる〉、〈一日中臥床していて褥創ができやすいので、日中座位を取り入れる〉などが挙げられていた。

次に、実習日数による経時的な変化を見るために実習1日目から5日目までを1日毎に集計したものが図1である。ここで1日目は、ほとんどの実習病棟でオリエンテーションや患者紹介等の実習内容となるため、援助を行うことが少なく、考察として日誌上にあがってこない状況である。全体としては、実習日数に関わらず患者に対して「知的関心」を多く注いだ考察内容になっている。また、「人間的な関心」、「技術的な関心」についても、実習経過による割合の大きな変化はなく、全体に対して、「知的関心」が6割から7割、「人間的な関心」が1割前後、「技術的な関心」が2割から3割強となってい

表4 考察内容の「三重の関心」別分類（詳細）

		1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	計
知的関心	発達段階	1	4	1	2	3	11
	健康障害の種類	2	16	9	9	2	38
	健康の段階	4	20	24	26	29	103
	生活過程の特徴	6	24	23	27	21	101
	援助の意味	2	21	19	20	29	91
	その他	4	25	17	30	23	99
	計	19	110	93	114	107	443
人間的関心	患者の頭の中を思い描く	1	10	11	15	14	51
	予測する手がかりをふやす		4	2	1	2	9
	計	1	14	13	16	16	60
技術的関心	対立を探る	2	9	13	17	6	47
	のぞまれる患者像	4	19	22	17	15	77
	その他	1	5	9	4	11	30
	計	7	33	44	38	32	154

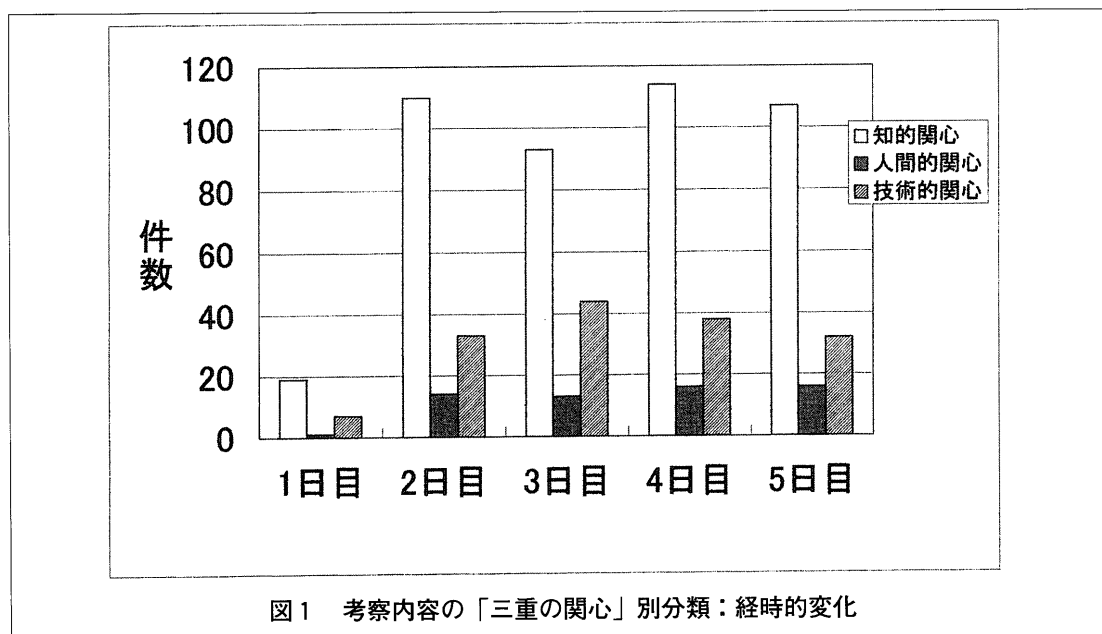


図1 考察内容の「三重の関心」別分類：経時的変化

表5 発展させている考察内容

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	合計
清潔	1 (11)	9 (16)	11 (28)	8 (12)	10 (26)	39 (19)
良肢位、移動	5 (41)	10 (23)	7 (21)	11 (27)	11 (19)	44 (24)
バイタルサイン		3 (17)	3 (15)	3 (25)	3 (25)	12 (19)
食事	1 (20)	5 (21)	3 (25)	4 (44)	2 (14)	15 (23)
排泄		2 (18)	6 (21)	7 (25)	2 (14)	17 (21)
環境		1 (20)	1 (10)		2 (18)	4 (15)
衣服		1 (25)				1 (8)
活動と休息					2 (40)	1 (13)
合計	7 (26)	31 (20)	31 (21)	33 (20)	32 (21)	134 (20)

* (%) は各項目の日別総数の割合

件数 (%)

る。それぞれの項目別に見たものもほぼ全体的な傾向と変わりなく、実習経過に関わらず「知的な関心」が高くなっている。

最後に、考察において「知的関心」、「人間的関心」、「技術的な関心」を関連させて展開している意見を抽出したものが表5である。実習初日を除くと実習経過に関わらず、日々の件数の2割となっている。「知的な関心」としての患者の状態から、「技術的な関心」として＜このような状態になるような援助＞を考えるとといった単純なものから、「知的な関心」の種々の側面を考え、患者の思いをはかり、援助の方法を考えるものまで様々であった。学生の思

考にはいろいろな段階があるが、たとえば、＜患者の臀部皮膚の状態、清拭援助時の患者の反応、及び発赤部の軟膏塗布後の患者の言動から、患者のつらさへの関心、下剤の服用の作用、便の性状、日々の排泄後の清潔の保ち方への疑問、年齢による皮膚の特徴、皮膚への影響に対する患者への認識の必要性等を考えて、清拭時の部分介助の方法などを総合的に判断して、患者の苦痛を取り除く援助技術及び留意点を考察した＞意見があった。

Ⅳ. 考 察

「知的な関心」では、「対象の発達段階」、「健康障害の種類」、「健康の段階」、「生活過程の特徴」の事実をもとに看護の視点から患者をとらえているかどうかを考えた。結果から、学生は「健康の段階」及び「生活過程の特徴」に対して主に視点をあてており、患者が身体的にどのような状態にあるのか、その人の入院生活はどのようなのかといった事実に関心が高いことがわかる。これは、患者を症状や身体の状態からとらえ、日々の援助で何をしなければいけないかという学生自身の行動と結びつけて考えていることを表している。多くの学生にこのような傾向があり、患者を目の前にしてまず何かをなさなければならぬという意識が常にあるのではないだろうか。反面、疾患の特徴が患者に及ぼす影響、発達段階の特徴などから、患者の全体像のイメージを広げる内容は日誌上みられない。現象像をもとに、どの理論をどのように使うことで自ら視点を広げることができるかを、カンファレンスや個別面談で示しながら、理論の活用を意識させることができるであろう。

また、生活面への関心の高さは、日常生活の援助技術の教科のみならず、他の看護学の教科でも常に学生へ意識づけしているところであり、それを反映しているものと考えられる。しかし、患者にとっての生活をその人の生きてきた過程や生活観、家族とのつながりの中でとらえることは難しく、より健康的な状態や生活を目指すといった看護としてのイメージの広がりがなかなかできにくい。そういった状況では、学生自身の生活体験に応じて、患者の生活体験を想像できる資料やエピソードを示すことが有効であると思われる。さらに、学生自らが視点を広げる力をつけるために、具体的に理論を活用しながら現象の意味をひも解く具体的な学習を示して、理論を意識的に活用することの面白さを学生と教員で共有する場を作らなければならない。

次に、「心のこもった人間的な関心」に対する特徴について考える。前述の結果から「人間的な関心」は、実習日誌の中で考察に上ることが少なく、全体の1割に満たない。さらに内容も、患者のそのときの言動のみから患者の気持ちを推測しており、学生自身の断定でとどまっている。その前後の状況を考慮することなく、その人の気持ちを理解したつもりになってしまう。そのため、患者の思いを確認

する手がかりを探そうとせず、患者の理解が深まらない。つまり、患者の気持ちという情報を意識的に読み取り確認して関係を発展させることが、学生に意識づけられていないということである。患者の反応に対して、もう一人の自分を相手の頭の中に飛び込ませて気持ちを感じ取ってくることの難しさ、大切さを知り、患者に近づくために気持ちを予測する手がかりを関わりの中で増やすことへの視点をさらに教育する必要がある。これは、実際の患者との関わりがある実習でこそ学び取れるものである。人間的な関心を学問として考えることを、教員自身がさらに強く自覚することが必要である。

次に、実践的及び技術的な関心について考えてみる。「技術的な関心」は全体の2.5割程度である。「人間的な関心」の1割弱からすればやや学生の関心は高いが、具体的な内容に特徴がある。実践的な面への学生の特徴は、一側面からのみ看護の方向性を定めてしまっている。そのため、学生の押し付けた目標を掲げてしまうといった問題をもつ。患者の持てる力をとらえて、何がより健康的な状態に近づくことを妨げているのかを見出す力、そこから援助方法を検討する判断力を多方面から考えるようになることが求められる。

最後に、考察の広がりについて、「三重の関心」の内容を相互に関連させて展開しているものを、日を追ってみた。全体の2割という結果および、実習日数を重ねてもその数がほとんど変動しないということは、日数の積み重ねだけでは習得されず、教員の効果的な活用もなされていないということである。三重の関心を寄せて考えられている内容も、すべての考察について同様に書かれているわけではないことから、学生が理論を意識して活用しているのではないと考えられる。何がどう「看護たり得ていた」のかを意識させる教育が必要である。つまり、それらの意味を抽出し、同じ原理を用いて次の援助に活用していくことを意図して教育する必要がある。

本学の学生は、准看護師教育の中で、基礎となる知識と技術に基づく看護実践能力を身につけることを学んできているため、実習の場で目の前にいる患者の状況に即、看護実践を結びつけていく傾向があることは、当然のことと考えられる。進学課程においてはそのために、自分が目指している看護実践が果たして、その患者にとってより健康的な状態に近づいているのか、看護たり得ているのかといった評

価値判断の視点を意識づけることが重要である。そのために、日々の援助一つ一つに対して理論を活用していることを自覚させることが大きな意味をもつ。

V. 結 論

基礎看護実習における看護実践と教科で学んだ知識及び理論とを統合させるために、教育上の課題が明らかになったので、以下にまとめる。

1. 患者の全体像に近づく前に目前に起こっていることに〈何かをなさそう〉という学生の行動面への意識が、置かれた状況のイメージを深める機会を少なくしている。したがって、学生が立ち止まり振り返る場を作る必要がある。進学課程の教育では、特に意識して教育しなければならない点である。
2. 不足している視点の一つ一つを他者からの助言を受けて気づくのではなく、学生自らが視点を広げる力をつけるために、教科での理論が活用できるということの学問への関心や楽しさを意識づける必要がある。そのために、実習に関わる教員間の統一が必須になってくる。
3. 実習での援助の意味を抽出し、同じ原理を用いて次の援助に活用していくことを意図して教育する必要がある。学生がそれまでに習得した知識や技術の確認ができ、その意味を意識して働かせる訓練が、理論と実践の統合のために必須の教育である。

謝 辞

今回の調査にご協力いただきました看護科1年次19回生みなさんに深く感謝いたします。

文 献

- 1) 「看護教育」編集室編：看護教育新カリキュラム展開ガイドブック No 5 基礎看護学. 医学

書院, 1997.

- 2) 薄井坦子：科学的看護論 第3版. 日本看護協会出版会, 1998.

- 3) 薄井坦子, 他：系統看護学講座 基礎看護学 [2] 基礎看護技術. 医学書院, 2001.

石黒順子, 川人しのぶ, 他：看護婦3年課程における基礎看護技術教育の実態. 看護教育, 38 (11) : 953-960, 1997.

薄井坦子：看護学原論講義. 現代社, 1995.

加納佳代子：看護専門職としての看護技術. 看護教育, 38 (11) : 887-901, 1997.

川島みどり：今, 求められる基礎教育の質. 看護教育, 38 (11) : 874-886, 1997.

島村澄江, 金子史代, 他：看護の原体験をつくる基礎看護学実習. 看護教育, 39 (4) : 314-318, 1998.

ドナルド R. ウッズ, 新道幸恵訳：判断能力を高める主体的学習. 医学書院, 2001.

村上みち子, 山口瑞穂子, 他：基礎看護技術の教育方法の検討－臨床指導者の基礎看護技術に対する意見の分析. 順天堂医療短期大学紀要, 8 : 79-87, 1997.

森 三春：2年課程における臨床実習の工夫. 看護教育, 36 (3) : 232-238, 1995.

山田里津監修：最新看護学ガイダンス 臨地実習編. 医歯薬出版株式会社, 1996.

吉岡一実, 片岡智子, 他：学生側評価による基礎看護実習の学習効果. 看護教育, 41 (10) : 866-871, 2000.

(平成16年1月30日受理)

西谷美幸

〒861-5598 熊本市和泉町325番地
熊本保健科学大学 看護学科

Educational Issues for Basic Nursing Practice to Apply Theory in Nursing Practice

Miyuki NISHITANI

Abstract

Basic nursing practice course of two-year program is designed to upgrade supporting skills daily life of two-year pre-nursing program and to enable the students to use the nursing process to plan, implement and evaluate nursing care for patients based on appropriate knowledge from nursing theory. The purpose of this study is to find out some educational issues related to students' identification to apply their knowledge and nursing theory in providing nursing care. Written self-evaluations of practical progress were analyzed from the point of so-called scientific nursing theory that is our basic theory of nursing practice. The study revealed that students tend to be interested in patients' subjective and objective symptoms that they can see, sometimes apply their knowledge on nursing care inappropriately, and think they should help patients first of all. This tendency disturbs the students from making appropriate nursing assessment observing patient in all. Our nursing education needs to be designed to enable the students to be interested in learning much more.